

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520594

研究課題名(和文) 受容バイリンガル児の言語発達研究

研究課題名(英文) Research on Language Development of a Receptive Bilingual

研究代表者

山本 雅代 (YAMAMOTO, Masayo)

関西学院大学・国際学部・教授

研究者番号：40230586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：女兒の言語使用の経年変化をみると、量的には英語使用が増加、日本語使用が減少、質的には日本語の文法理解に進展がみられなかった。これは予想されたことであったが、母親の言語使用には予想外の変容が認められた：女兒の英語使用の増加に伴い、それまで日本語のみの使用を心がけていた母親にあって、英語使用が有意に増え、日本語のみの使用が有意に減少した。

本研究から、こうした経年変化は、子どもの一方の言語に生じる発達の停滞/減退が、親の当該言語の使用の減少を招き、更にそのことによって子どものこの言語の発達の停滞/減退が増進するという、親子間に生ずる相互作用の力学による負の循環の結果として生ずるとの示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：This study notes chronological changes in the language use of one bilingual child: From a quantitative point of view, her use of English increased and her use of Japanese decreased, and from a qualitative point of view, her comprehension of Japanese grammar (case particles) did not advance. While these results were not surprising, an unexpected phenomenon was observed in the mother's language use: despite her strenuous attempt to use only Japanese in mother-child conversation sessions, her use of English increased along with the child's and, complementarily, her sole use of Japanese decreased, both at a statistically significant level.

What this suggests is that the stagnation/retreat of the child's subordinate language is the circular result of parent-child interactive dynamics, with the stagnation/retreat of the child's subordinate language causing the decrease of the parental use of that language, which in turn exacerbates the retreat of the child's subordinate language.

研究分野：バイリンガリズム

キーワード：バイリンガリズム 受容バイリンガル 英語-日本語バイリンガル 言語使用 言語発達 劣勢言語 優勢言語 相互作用

1. 研究開始当初の背景

報告者は、長年にわたり、国内外に居住する、いわゆる国際結婚家族を対象にそこで生育する潜在的バイリンガルの子どもの言語習得の背景となる、家族の言語使用状況を調査、分析してきた（たとえば、平成 7～8 年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)、平成 15～16 年度科学研究費補助金萌芽研究、平成 21～23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)等）。これら一連の研究からは、実際にこうした家族の言語使用状況は必ずしも 2 言語間で均等ではないこと、そこで生育する子どもの言語使用の度合いも言語間で異なり、多くの場合、当該社会における主流派言語が今一方の非主流派言語に勝る傾向が強い、すなわち 2 言語の能力間に優勢、劣勢関係が生じやすいことをデータの収集・分析を通して実証した（例 Yamamoto, 2001、山本, 2010）。

これら社会言語学的な観点からの研究において、一定の知見を得たことから、よりミクロで言語そのものを対象とした言語学的観点からの研究を進めることで、より包括的なバイリンガルの言語習得・発達に関する知見を得ることができると考え、新たな科研費による研究（平成 24 年～26 年度および延長分の 27 年度）に着手した。

通常、バイリンガル児の言語習得・発達研究では、分析するためのデータが得やすい産出バイリンガル（いずれの言語についても、発話、理解の両能力を発達させている者）を対象にするが、この新たな研究では、受容バイリンガル（一方の言語については年齢相応に話し[産出]、理解する[受容]が、今一方の言語については理解はするものの、ほとんど、又は全く話さないというタイプのバイリンガル）を対象に、その言語習得・発達がどのようになされるのか、よりミクロな言語学的視点からの研究を進めることとした。それは、一つには、上記の通り、受容バイリンガルでは発話が極めて限られるためデータが得にくいことから研究が少ないこと、二つには、研究が少ないにもかかわらず、受容バイリンガルは必ずしも少なくないこと（Billings, 1990; Shang, 1997; Noguchi, 2001）という現実があるからである。

2. 研究の目的

上述のように、一方の言語（劣勢言語）では理解はするものの、ほとんどまたは全く話さないという「受容バイリンガル」として育つケースが少なくない。それにも関わらず、受容バイリンガルの言語、とりわけ発話が寡少とされる劣勢言語の発達に関する知見は乏しい。当研究では、日本語を劣勢言語とする英語・日本語受容バイリンガル（以後、**女児**）と日本語を母語とする日本語・英語産出バイリンガルの母親との会話をデータに、寡少なながらも産出される日本語による発話の量的・質的特性、すなわち

- ・量的側面：量的にどの程度の発話があるのか
  - ・質的側面：質的にはどのような特徴がみられるのか
- を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

基本的に、前回（平成 21～23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)）での方法を踏襲し、

- ・母親-女児間の会話の定期的採録
- ・母親、女児との面談

を実施した。採録した音声データは順次文字化し、上述の目的に沿って、日本語発話の量的、質的経年変化（特性）を明らかにすべく分析を行った。

4. 研究成果

(1) 研究の結果

- ・量的側面：量的にどの程度の発話があるのか

今回及び前回の研究期間を合わせて通算 8 年にわたる採取データのうち、各年度の初回に採取されたデータを言語の使用パターン（I～IX）ごとに分けて集計した（表 1）ところ、いくつか特徴的な点が明らかになった。

表 1 8年に亘る母親-女児間の対話における言語使用パターンの経年変化

言語使用パターン データ番号 女児年齢	I (E-E)	II (J-J)	III (E-J)	IV (J-E)	V-IX (CS)
#1	3;0*	0.0	31.0	0.0	56.6
#13	4;0	2.5	23.5	0.0	52.0
#25	5;0	0.7	30.3	0.7	50.0
#36	6;1	4.4	5.3	0.4	68.7
#46	7;0	0.5	9.5	0.0	61.4
#58	8;0	3.6	7.2	0.0	40.4
#68	9;0	4.4	3.0	0.0	69.0
#78	10;0	20.9	1.1	0.0	53.7
#86	10;11	10.2	0.9	0.0	62.4

\*3;0=3歳0ヶ月

	内訳				
	V (E-CS)	VI (CS-E)	VII (J-CS)	VIII (CS-J)	IX (CS-CS)
#1	0.0	0.0	10.9	0.8	0.8
#13	0.0	13.0	7.5	0.5	1.0
#25	0.0	7.0	7.7	2.8	0.7
#36	0.0	19.8	1.3	0.0	0.0
#46	0.0	24.8	1.4	2.4	0.0
#58	0.0	46.2	1.8	0.9	0.0
#68	0.0	21.7	2.0	0.0	0.0
#78	0.0	23.7	0.0	0.6	0.0
#86	0.0	26.5	0.0	0.0	0.0

<母親-女児間の対話における言語使用パターン>

2つの言語が関わる対話において使用される言語の組み合わせには9通りのパターンがある（山本, 2010）。表1の冒頭にあるのがその9通りのパターンである（ここでは関わる2つの言語は日本語 [J]と英語[E] : I

(両者が英語のみ使用)、II (両者が日本語のみ使用)、III (前者が英語のみ、後者が日本語のみ使用)、IV (前者が日本語のみ、後者が英語のみ使用)、V (前者が英語のみ、後者が日英両言語使用)、VI (前者が英日両言語、後者が英語のみ使用)、VII (前者が日本語のみ、後者が日英両言語使用)、VIII (前者が日英両言語、後者が日本語のみ使用)、IX (両者が日英両言語使用)。この2者間の言語使用パターンという観点から、今回のデータ分析の結果を概観する。

① ここで集計に使用した第1回目 (#1) から、8年目の最終回 (#86) までの9回のデータをみると、各年度初回採録のデータのみならず、6年目 (#58) を除く全期間を通して、母親が日本語、女兒が英語を使用する IV (J-E) が最多である。このことは、研究当初より女兒が日本語での発話が少ない受容バイリンガル状態にあったこと、また母親が、女兒に対して、自身ができるだけ日本語を使用することで、その日本語の発達・使用を促したいと望んでいたことから、当初より予想されたことであった。

② そうした女兒の言語使用の実態と、母親の思いを背景に、母親と女兒との間の言語使用パターンを時系列で眺めると、そこにある傾向を認めることができる。①では、母親と女兒との間の言語使用パターンのうち最も頻繁に用いられていたのが IV (J-E) であったことを指摘したが、初期の段階では II (J-J) もそれに続いて多かったことを指摘しておく必要がある。それは、既述の通り、女兒が日本語での発話が少ない受容バイリンガル状態にあったことを勘案すると、予想を裏切る言語の使用パターンと言えるからである。しかしながら、採録した発話データを丁寧に見ていくと、ここで日本語として含めているものの多くが、「うん」のような短い返答であったり、直前の母親の日本語の一部を反復したものであったりと、いわば自主的に言葉を紡いでいくような言語産出行為の結果としての日本語の使用というものは性質を異にしたものであり、どちらかと言えば、母親の日本語発話に、自身の発話を同調させようとする女兒の行為の試み・意図の表出としての日本語の使用と解釈しうるものと言える。

③ 一方で、母親、女兒の両者が英語を使用する I (E-E) は、最初の数年間はほとんど見られなかった。しかし、6年目頃より、II (J-J) と入れ替わるように、徐々に増え始め、8年目の最終回ではやや下がったものの、8年目の初回では大幅に増えている。それは、①で言及したように、「自身ができるだけ日本語を使用することで、女兒の日本語の発達・使用を促したいと望んでいた」母親が、それまで英語の使用を意図的に控えていたものの、徐々に自身の発話に英語を使用し始めたことが背景にある。この英語の使用の増加は、

女兒の年齢が高くなり、母親との対話の内容がより複雑になったこともあり、対話者 (女兒) に特定言語 (日本語) の使用を促すべく意図にその言語を使用するという象徴的使用では、女兒に意図したことが明快に伝わっているかどうか分からないという懐疑的な状況の下にあって、情報伝達の成立に疑義を感じた母親の、実利的対応の結果と推測できる。事実、面談において、母親から、ついつい英語を使ってしまおうとの「反省」の弁を聞くことがしばしばあった。

<母親-女兒の対話における各自の使用言語>

相手の使用言語にかかわらず、女兒、母親各自がどの言語を使用していたかという観点から、この8年に亘るデータを集計しなおして、 $\chi^2$  検定にかけたところ、表2、表3のような結果が得られた (紙幅に限りがあるため、期待値は割愛、実測値のみ掲載)。

表2 8年に亘る母親-女兒の対話における  
女兒の使用言語の経年変化:  $\chi^2$  検定・  
残差分析の結果

母親-女兒間での 女兒の使用言語		日本語のみ	両言語	英語のみ
データ番号	女兒年齢	II, III, VIII	V, VII, IX	I, IV, VI
#1	3;0	▲ 41	▲ 15	▽ 73
#13	4;0	▲ 48	▲ 17	▽ 135
#25	5;0	▲ 48	▲ 12	▽ 82
#36	6;1	▽ 13	3	▲ 211
#46	7;0	25	3	182
#58	8;0	18	4	▲ 201
#68	9;0	▽ 6	4	▲ 193
#78	10;0	▽ 3	▽ 0	▲ 174
#86	10;11	▽ 2	▽ 0	▲ 224

▲有意に多い ▽有意に少ない  $p < .05$   
 $\chi^2(16) = 309.969$   $p < .01$   
 Cramer's  $V = 0.298$

表3 8年に亘る母親-女兒の対話における  
母親の使用言語の経年変化:  $\chi^2$  検定・  
残差分析の結果

母親-女兒間での 母親の使用言語		日本語のみ	両言語	英語のみ
データ番号	女兒年齢	II, IV, VII	VI, VIII, IX	I, III, V
#1	3;0	▲ 127	▽ 2	▽ 0
#13	4;0	▲ 166	▽ 29	▽ 5
#25	5;0	▲ 125	▽ 15	▽ 2
#36	6;1	171	45	11
#46	7;0	152	57	▽ 1
#58	8;0	▽ 110	▲ 105	8
#68	9;0	150	44	9
#78	10;0	▽ 97	43	▲ 37
#86	10;11	▽ 143	60	▲ 23

▲有意に多い ▽有意に少ない  $p < .05$   
 $\chi^2(16) = 260.340$   $p < .01$   
 Cramer's  $V = 0.273$

① 残差分析の結果をみると、最初の3年間

(#1, #13, #25) は女兒も母親も日本語の使用が有意に多かったことがわかる。母親については、日本語のみを使用することが多かったが、女兒については英語との併用(V, VII, IX)という形態での使用も有意に多かった。

② その後、女兒については4年目(#36)以降、母親については6年目頃より、このIIのパターンが減少傾向を示し始め、女兒では7年目(#68)、母親でさえも8年目(#78 & #86)になると有意に少なくなった。

③ その一方で、ちょうどシーソーのように英語の使用が上昇し、とりわけ女兒においてそれが顕著で、4年目以降(5年目の#46を除く)、有意に多くなっている。母親でさえも、6年目(#58)では日本語との併用という形態で、また8年目に入ると英語のみの使用が有意に多くなり、日本語のみの使用が有意に減少するに至っている。

- ・ 質的側面：質的にはどのような特徴がみられるのか

上記のデータからも明らかなように、発話が極めて少なく、あっても文の構造を明らかにするような長さを持ったものが採取できず、産出面からの研究については報告しうるものはない。一方、受容面からは、文法を受容能力を見るための簡易なテストはこれまでに平成21年度を初回として、平成25年度、平成26年度と3回実施しているの、その結果を報告しておきたい(2001)。(2001)。

このテストは格助詞の理解を見るもので、意図的に語順を入れ替えた文を、助詞によって、誰が行為者で、誰が被行為者かを判断させるものである(例 赤いくまさんが青いくまさんにりんごをあげます。赤いくまさんに青いくまさんがりんごをあげます)。具体的には、一対の絵(一方が正しく、他方が誤っている)を示して、文の内容を正しく表した絵を選ぶことが課題となっているものである。女兒の正答率は1回目(平成21年度)40%、2回目(平成25年度)50%、3回目(平成26年度)50%であり、格助詞の機能を充分理解しているとはいいがたい結果であった。また年齢の進行に従って理解が進んでいるようすも伺えない。

平成27年度より3年にわたる新たな科研費を受給し研究を続行しており、平成28年度には、これまで手薄であった受容能力を中心とした質的側面からの研究を進めたいと考えている。

## (2) 本研究が示唆するところ

最後に、本研究で得た知見がバイリンガルの言語習得・発達、言語使用を課題とした研究に何を示唆するのかを簡単に述べておきたい。

言語の習得と言語の使用は表裏一体を為しており、言語の習得がなければ、これを使用することはできず、使用することがなけれ

ば、これを習得するのはきわめて難しいことになる。とりわけ、複数の言語に触れて成長する環境に育つ子どもについて、どの言語を習得し、使用するようになるのか、あるいはどの言語を使用し、それを習得していくことになるのか、そのような子どもの言語発達の過程における親の役割は、子どもの「健全な」成長一般におけるそれと同様、極めて重要であろう。

複数の言語が使用されている環境に生まれ育つ子どもの言語の発達に関して、多くの親が関心を寄せ、また懸念をすることの一つに、言語の混合使用がある。親の中には、これを肯定的に捉える者、一過性のものとして許容する者、子どもの「健全な」言語習得に有害であると否定的に捉える者もいる(Barron-Hauwaert, 2004)。

そしてLanza(1997)は、子どもの言語混合に係わって、親の役割を「子どもの言語混合に対する親の方略」(Parental discourse strategies towards child language mixing)としてモデル化した。この方略は、子どもの言語使用(単一言語使用か、2言語混合使用か)を制御するのは親である、すなわち、親が子どもにどのように言語を使用するかによって、子どもの言語使用が制御されるという考えに基づいている。

しかしながら、本研究では、親の方略が一方的に子どもの言語使用を制御するのではなく、子どもの言語使用が親の言語使用に影響を及ぼすといった、親子の間の相互作用が大きく関わっていることが示された。敷衍すると、長期に亘る母親と女兒の言語使用の経年変化の分析から、経年で変化を見たのは女兒ばかりではなく、母親にもそれが及んでいることが明らかになった。具体的には、女兒の英語使用が増加すると共に、それまで日本語のみを使用することを心がけていた母親の日本語のみの使用が有意に減少し、逆に英語使用が有意に増えたのである。

本研究から、言語の使用における子どもの経年変化は、当該の子どもの方の言語(通常、劣勢の立場にある言語)に生じる発達の停滞/減退が、親の当該言語の使用の減少を招き、更にそのことによって子どものこの劣勢言語の発達の停滞/減退が増進するという、親子の間に生ずる相互作用の力学による負の循環の結果として生ずるものではないかとの示唆を得るに至った。

## <参考文献>

- ① Barron-Hauwaert, S. (2004). *Language strategies for bilingual families: The one-parent-one-language approach*. Clevedon: Multilingual Matters.
- ② Billings, M. (1990). Some factors affecting the bilingual development of bicultural children in Japan. *AFW Journal*, April, 93-108.
- ③ Lanza, E. (1997). *Language mixing in*

*infant bilingualism: A sociolinguistic perspective.* Oxford: OUP.

- ④ Noguchi, M. G. (2001). Bilinguality and bicultural children in Japan: A pilot survey of factors linked to active English-Japanese bilingualism. In M. G. Noguchi & S. Fotos (Eds.), *Studies in Japanese bilingualism* (pp. 234-271). Clevedon: Multilingual Matters.
- ⑤ Shang, S. (1997). Raising bilingual/bicultural children in Kyushu: A survey. *Research Bulletin of Kagoshima Women's College*, 18(2), 43-58.
- ⑥ Yamamoto, M. (2001). *Language use in interlingual families: A Japanese-English sociolinguistic study.* Clevedon: Multilingual Matters.
- ⑦ 山本雅代 (2010). 「第 9 章 バイリンガリズム:モノリンガルの視点からの脱却」. 西原鈴子 (編)『言語と社会・教育』(pp. 193-212). 東京:朝倉書店.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 山本雅代, 受容バイリンガルの言語使用、言語と文化、査読無、16号、2013、37-46
- ② 山本雅代, 「日本語ーフィリピン諸語」異言語間家族の言語使用状況: 「言語の威信性」を枠組みに、国際学研究、査読無、2巻1号、2013、9-19
- ③ 山本雅代, バイリンガルの子どもの言語獲得・発達、チャイルド・サイエンス、査読無、9巻、2013、26-29
- ④ Yamamoto, M. Code-switching accounted for by Relevance Theory, *Journal of Policy Studies*, Non-refereed, 44, 2013, 85-91

[学会発表] (計 3 件)

- ① Yamamoto, M., Bilingualism: Children growing up in a bilingual milieu, The 2<sup>nd</sup> symposium on bilingualism, Guest speaker, 29, April, 2016, Osaka International School of Kwansai Gakuin (Osaka-fu, Minoo-shi)
- ② 山本雅代, 二言語環境での親子の対話: 使用言語を制するのは誰か?, 第1言語としてのバイリンガリズム研究会、招待講演(基調講演)、2015年5月30日、関西学院大学(大阪府、大阪市)
- ③ 山本雅代, 私たちはなぜ「第1言語としてのバイリンガリズム」を研究するのか?, 第1言語としてのバイリンガリズム研究会、招待講演、2014年5月31日、立教大学(東京、豊島区)

[図書] (計 2 件)

- ① 山本雅代 (共著)、現代家族ペディア、弘文堂、2015、359 (本人担当箇所は「第11章 グローバリゼーションと家族」収録の項目「国際結婚と二言語使用」(269-270))
- ② 山本雅代 (編著・共著)、バイリンガリズム入門、大修館書店、2014、243 (本人担当箇所は「はじめに」(iii-viii)、「第1章 バイリンガル・バイリンガリズムとは」(3-19)、「第2章 バイリンガルの言語習得」(21-36)、「第6章 異言語間家族の言語選択・使用」(81-96)、「第15章 バイリンガリズムに関する研究の手法とデータ」の「(3) 質問紙調査」(225-226))

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 雅代 (YAMAMOTO, Masayo)  
関西学院大学・国際学部・教授  
研究者番号: 40230586